氏名	大井　隆弘
ヨミガナ	オオイ　タカヒロ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第460号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　吉田五十八の住宅作品に関する研究 その変容過程と日本近代住宅史における意義

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	光井　渉
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	野口　昌夫
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	長尾　充
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	ヨコミゾ　マコト
（副査）	神奈川大学	教授		内田　青蔵

（論文内容の要旨）

本研究は、建築家・吉田五十八（1894～1974）によって設計された住宅作品の分析を通して、その変容過程を明らかするとともに、吉田の住宅作品がもつ日本近代住宅史における意義を示すことを目的としている。

吉田五十八は日本の近代を代表する建築家の一人である。吉田は、東京美術学校在学中の大正8年に設計活動を開始し、亡くなる昭和49年までの約50年に数多くの住宅作品を設計した。大壁の手法を用いて日本の伝統的な建築の近代化に取り組んだことが高く評価され、今日では「近代数寄屋住宅の大家」などと評されている。また、起居様式に関する積極的な提案を行なったことから、近代住宅史においてもその重要性が指摘されており、中には吉田を明治期以来の和洋折衷の到達点として位置付ける論考まである。しかし、ほとんどの論考は雑誌などに掲載された一部の作品のみを扱っており、その期間も限定的で、吉田の住宅作品の全体像は未だに把握されていない。吉田の生誕120周年を迎えた今日、もともと少数であった現存作品が取壊され、また現存するものも改修などの更新に迫られている。こうした中にあって、吉田の基礎とも言える住宅作品の具体的な全体像や変容過程を把握することは急務である。そこで、東京藝術大学大学美術館（以下、芸大美術館）に所蔵されている図面調査や未整理資料の整理を行い、具体的な研究を開始した。

吉田により設計された住宅に関する作品は現在、芸大美術館に所蔵されていないものも含めて142作品が確認されている。その内、建設年が明らかになっているものは129作品で、さらに図面が残る作品は114作品ある。そして、住宅の全体を把握するために必要不可欠な平面図のある作品は86作品である（部分的な増改築作品と非公開の秩父宮邸を除く）。本論では、住宅作品の建設地や施主などの分析は129作品（1群）を扱い、具体的な作品の分析は86作品（2群）を扱っている。

本論文では、まず序章および第１章では、住宅作品に大きな影響を与えたと考えられる事務所の移転や所員・室員の出入り、施工者の交代について確認している。また、建設地から平面形式まで、徐々にスケールを拡大しながら住宅作品を分析し、その基本的な性格を確認している。

その上で２章から４章では、住宅作品の出入口、起居様式（居室）、設備室と、平面全体を網羅するように分析を進めている。まず２章では、表玄関、内玄関、勝手口という３つの出入口を分析した。そこでは、表玄関と隣接していた内玄関が、勝手口へと近づき、勝手口に設置されていた焚口が下駄箱に代わると、次第に勝手口が減少する過程などを明らかにしている。３章では、12の居室を取り上げ、起居様式の変容過程を、接続方法や段差など、室相互の関係も踏まえて明らかにした。すると、1957年に基準となる床面高さが床坐から椅子坐へと逆転するという重要な事実が明らかになった。４章では、台所、浴室、便所を中心に、その配置、設備について詳細な検討を行っている。ここではまず、設備室全体の方位や配置の順序を検討し、吉

田の住宅作品の設備室が北側に集中していること、表玄関から女中室、台所、浴室の順で配置されていることを確認した。その上で、台所、浴室、便所と個別に分析をしている。

続いて、５章と６章では意匠について検討している。まず５章では内部意匠として、柱や吊束といった線や、天井や壁といった面を分けて分析をした。ここで明らかになった最も重要な内容は、吉田の主張「近代数寄屋住宅と明朗性」で行われた意匠上の提案が、1933年から1941年という短期間にしか見られなかったことであった。また６章では、内部が大壁化された際、外部にどのような影響が現れたのかも含め、屋根、壁、妻面の意匠について検討を行っている。そこでは、「近代数寄屋住宅誕生の家」とされる吉屋邸（1936）においても、外部には吊束などが確認され、完全な大壁化が達成されたのは1940年であったことなどが確認された。

以上の分析により、吉田の住宅作品は1935年前後と1955年以降の時期に変化が集中して確認され、全体として４つの画期区分が見出された。そこで本論は、４つの時期毎に各章の内容をまとめた。また、日本の近代住宅史が抱える今後の課題を上げ、吉田の住宅作品とその資料群が、それに応えるものであることを示している。さらに、近代建築史において頻繁に用いられ、吉田の説明にも度々使用される「流動性」や「均質化」といったキーワードについても整理している。

（総合審査結果の要旨）

申請者の論文は、日本近代を代表する建築家である吉田五十八の住宅作品に関する総括的な研究である。

東京藝術大学教授を勤めた吉田五十八は、５０年間の長期に渡り設計活動を継続し、その間、確認されているだけでも１４２棟の住宅設計を手がけて、その業績に対して文化勲章を授与された建築家である。伝統的な日本住宅の特質を継承しながら近代的な生活スタイルとも合致した吉田の住宅作品は、「近代数寄屋住宅」と評され、広く建築界に影響を与えたことは周知の事実である。そのため、既に伊藤ていじ・鈴木博之など数多くの研究者によって考察検討が加えられている。しかし、これら先行研究は、限られた数少ない事例を基にしたものであり、その視点も意匠研究にとどまってきた。これに対して申請者の論文は、吉田五十八の全作品を詳細に検証することでその変容過程を明らかにし、日本近代住宅史の中に位置付けた点と、従来からも注目されてきたその特徴的な意匠がどのような背景から生まれたものであるかを明らかにした点に最大の特徴がある。

こうした視点を持つ申請論文は、全８章で構成されている。

まず「序章」では、先行研究の総括を通じて申請論文の視点を明らかにすると同時に、吉田の設計活動を支えた所員や施工者などの変遷を明らかにしている。これらは、申請論文全体の前提ともいうべき内容となっている。

続く第１章から第４章までは、建築計画学的な手法を用いて、吉田の住宅作品の変遷を丹念に追った部分である。このうち、第１章「敷地利用計画と平面形式」では、所在地の分布状況・敷地の利用方法や建築の配置計画・主屋における廊下の意味について検討することで、吉田五十八の住宅作品を郊外に建設された中廊下型の中上流住宅として明快に位置付けている。第２章「出入口」は、表玄関・内玄関・勝手口という３つの出入口の配置とそれらの隣接室の性格から、出入口の性格が履物や衣服の変化と連動して変化していく経緯を丹念に論じ、内玄関と勝手口の合体という方向性を導き出している。第３章「起居様式」は、床坐式が主であった日本住宅の中に椅子坐式が取り入れていく過程を、吉田という一人の建築家が行った試行錯誤の経緯から読み取っていった部分で、床坐式の居室と椅子坐式のベランダが接続する形式などこれまで吉田の特長とされてきたものを過渡的な試みと結論付けるとともに、日本近代住宅史上における椅子坐式の導入過程の具体的な姿を示したものともなっている。第４章「設備室および設備機器」は、吉田の住宅作品における水回りを中心とした設備の導入状況を検討した部分で、単なる設備導入の時期確定にとどまらず、設備機器導入が間取りなどの計画に与えた影響をも検討している。以上、第１章から第４章では、２０世紀という日本の住宅形式が激変した期間にあって吉田の住宅作品がどのように変遷していったのかを明らかにすることに成功している。これは、吉田五十八という一人の建築家の作家論にとどまらず、長期間にわたって膨大な数の住宅を設計した一人の建築家の分析を通じて、日本近代住宅史の解釈に新たな知見を提供するもの

でもある。

後半の第５章及び第６章は、吉田作品の意匠の特質をまとめ、その変容の背景について明らかにした部分である。第５章「内部意匠」では、吉田の最大の特徴ともいえる柱を隠す大壁の意匠を具体的な事例と吉田の言説を交えて検討した部分である。ここでの内容は、柱や長押あるいは天井など数多くの線的な部材が露出する日本の伝統的な住宅建築の意匠を出発点としながら、まず内法上の小壁や天井次いで内法下の壁面という段階を経由して大壁化が進行し、最終的には極めて簡潔な意匠に至った状況を、その都度発生した問題に対してどのように対処したのかという視点から説得力をもって考察している。そして、その中で、内法端部や引込戸あるいは照明周辺といった吉田に特有な納まりを重視した細部の意味を明らかにしていることも重要である。本論の最後にあたる第６章「外部意匠」は、屋根形状及び外壁の意匠を検討した部分であり、内部の大壁化と時期的に齟齬する外壁の大壁化の分析などを通じて、吉田の設計理念を明確化している。

末尾にあたる終章は、第６章までの内容を踏まえて吉田作品の変遷過程を総括している。ここでは、吉田の住宅作品を、その傾向から４期に分け、それぞれの時期の特質を改めて提示することで、吉田の住宅作品を日本近代住宅史の中に位置付けている。

以上のように申請論文は、吉田五十八という日本近代を代表する建築家の住宅作品を総括的に扱ったものである。作家論として極めて高い水準にあると同時に、長期に渡って設計活動を継続した他に類例の少ない吉田の作品分析を通じて、日本近代住宅史の再検討を促す内容となっていることにも大きな意義を見出せる。したがって、申請論文は、得られた結果に加え、今後の研究動向を示唆している点からも特筆すべき内容をもつものとなっており、本学大学院の博士学位論文に十分に値するものとして評価できる。